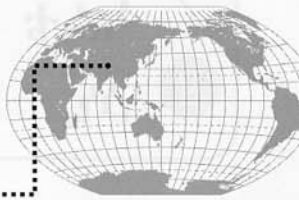


# チベット、ポン教の マンドララとタンカ

長野 泰彦 ながの やすひこ  
人間文化研究機構理事  
民族文化研究部



## 「ポン教」とは 修験道のようなもの

チベットと聞くと、「ラマ教」とひらめく人がいる。本館の展示にもその言葉は用いられているから、一応ボビエラーな名前と言えらるだろうが、ラマ教という宗教はない。この用語は、モンゴルに布教に来ていたカトリックの宣教師団がそこにおこなっていた宗教を指して名づけたものである。それがたまたまチベット大乘仏教だったので、それ以後、チベット仏教全般をもラマ教と言いつつ慣わすようになった。ラマ教と名づけた理由は、「ラ」（生命の根源の意）を託する師を大事にするることによるが、その理屈をゆけば、どの宗教もラマ教になってしまう。

チベット大乘仏教は七世紀にヤルン家がチベットにはじめて統一王朝を立てたとき、統一のイデオロギーとして公的にインドから導入された。聖徳太子による仏教導入の事績とよく似ている。チベットにはそれ以前からポン教という宗教があったのだが、統一王朝がまずしなければならなかった仕事は、ポン教とそれにつながる世俗勢力の力を削ぐことであった。ポン教自体、チベットにもとからあったものではないらしく、伝

承によれば、西方から移入された。また、統一政権が目ざしたほどには組織化されていなかったが、民間信仰やシヤニズム等の土着的要素と密接な関連を保ちながら、特に葬送儀礼において独自の体系を築きあげてきたようだ。仏教側からの迫害は、七世紀以降二〇世紀にいたるまで断続的に続き、ポン教集団は（中央チベットから見れば）辺境の地に追いやられた。中国青海省、四川省、雲南省、甘肅省、およびヒマラヤ南麓などであるが、少数集団ながら、現在でも強固にその伝統を保っている。一方、チベット仏教はポン教から多くを学び、多くを借用した。チベット仏教の哲学・儀礼の随所にポン教からの影響が認められる。

日本における宗教事情との対比から、ポン教を日本の古い神道にたとえる人がいるが、私はチベットの仏教もポン教も、日本でいえば、修験道だと思う。ポン教のほうがやや原初的な修験道といえるかもしれない。修験道が日本の狩猟採集文化を背景とする基層文化を色濃く反映しているのと同様、ポン教はチベット仏教よりは古い精神基層を保存していると考ええる。ただ、日本にはポン教研究の基盤そのものがない。世界的に見ても、研究は仏教に比べ、はるかに遅れている。そのような状況を改善するため、一

九九五年度以降ポン教文化研究に注力してきた。

私はチベット・ビルマ歴史言語学を専攻しており、ポン教徒達が話していたとされるシヤンシュン語（九世紀には死語となった）の再構成に興味があったのだが、その関係でポン教文化全般を扱うことになったのである。研究基盤整備として、シヤンシュン語再構成に有用な未記述言語の調査研究、ならびに、ポン教関係の典籍と図像資料の収集をおこなうこととした。ポン教には宗派がなく、仏教におけるタライ・ラマのような存在もない。したがって、典籍にせよ、図像資料にせよ、何がオーソドックスかがわからない。一世紀以降仏教の動きに刺激されて、多くの典籍類が書かれ、編纂されたが、それが仏教でいうカンキユル（経部）やテンキユル（論部）のような体系をなすに至らなかったらしい。

## 五台の、パソコンを もってこんで目録作成

一五世紀になって典籍類の体系化がおこなわれ、カ（仏教の経部に相当）やカテン（論部）にまとめられたが、「カ」はともかく、「カテン」は下位分類に貫性がなく、付属する目次にも信

できたのである。

## ポン教の体系を示しうる 世界唯一の資料

マンドララやタンカそのものに美術的価値を認める立場もあるが、民族学に従事する者にとつては、ポン教徒の宇宙観をシステムとして理解することが第一であり、その作業を文献整理の段階からおこなえたのはラッキーというべきであろう。マンドララとは神々のパステルを真上から見た二次元図像であり、多くは幾何学的絵柄をなす。これに具体的な神格を落とし込んだものがタンカ（いわゆる仏画）である。また、マンドララとタンカの本来の用途は、僧が瞑想するとき、瞑想の順序やゴールを間違えないように横においておく「参考図」であって、大変実践的なものである。この点、マンドララを仏像がわりに尊崇の対象とする日本とはずいぶん異なる。

マンドララとタンカそのものは、ティエンノルブ寺をネパールに再建したテンジン・ナムタク座主の出身地、中央チベット北部のキヌポ地方に在る絵師に依頼した。伝統的な書き方と技術を身につけているからである。サムテン・カルメイ氏、立川武蔵氏博名誉教授と筆者が科研の調査などを利用して、数回にわたり、できた図像と儀軌を突き合わせる作業を繰り返し、二〇〇四年度にやつすべの図像が揃った。

民博のポシ教図像資料はこのようにして収集された新しいもので、古美術としての価値はないが、体系を示しうる世界で唯一の資料である。この成果は「国立民族学博物館調査報告」の二二号および六〇号として公開されている。



ゲニエン・テクペー・マンドララに対応するタンカ（標本番号H21434）



ゲニエン・テクペー・マンドララ（標本番号H221529）



テンジン・ナムタク師

頼性がなかった。したがって、われわれの仕事はまず經典プロパー以外の文献がつかまえてこまめにカテンの目録を整備し、何がどこにあるのかを特定することから始まった。一九九七年春、五台のラップトップコンピュータをネパール、カトマンズのティエンノルブ寺にもちこみ、目録の作成を目

指した。厄介だったのは、コンピュータのネパールへのもち込みだった。当時、コンピュータは輸入すると三〇〇パーセント課税対象となる物品だったからだ。科研の分担者が一台ずつ抱え、どうにか無税関をすり抜けたときはほっとした。次なる難関は、何ゆえに「目録」を作らねばならないのかをポシ僧に理解してもらうことだった。彼らの勉強方法に由来する知識と記憶力は抜群で、すべての經典は彼らの脳の中に「リニア」に納まっているから、別に目録など必要としない。中途半端に西欧の論理によって仕事をしているわれわれのほうがおかしいのである。

この調子だと、コンピュータの操作を教える段にならたらどうなることかと心配していたが、杞憂だった。もちろん、コンピュータ用語をチベット語で表現するのには至難の業である。チベット人学者、サムテン・カルメイさん（二〇〇三年度外人客員教授）にとつてさえ、だが、アシスタントが英語で（チベット人学者は英語はまったくわからない）説明しつつ、入力方法を实地に示すと、三〇分後には彼らは自分たちで直接入力し始めた。驚くべき好奇心と理解力である。

こうしてできたカテン目録をもとに収集すべき図像資料の選定が始まった。極めて迂遠な手順だったが、これが逆に幸いした。仏教の場合、テンキユルのなかに図像同定の文献があるのではなく、種々の文献類から抽出された図像に関する儀軌（規則）と解釈が別に編纂されている。サキヤ派の「ギユデー・クントウ」はその典型である。ポシ教の場合はこれがなかったため、われわれの手で儀軌を論語文献群から抜き出し、学僧の説明を受けつつ、体系を再構成することが